NY エッセイ 26

中瀬有紀

国境を超える照明業務



The Bahamas

2月にツアーの仕事で日本に行くというニューヨーク在住アメリカ人の照明家友達が、日本で仕事をするにあたって何を知っておくべきか教えて欲しい、と私をお茶に誘いました。彼女は照明スーパーバイザーという肩書きで来日し、日本人の現地スタッフと共に照明業務に従事します。事前に送られた仕込み図を元に設営は進み、彼女はフォーカスから参加することになると聞きました。

彼女が一番知りたがっていたのは、照明業務における日米の差です。小規模の仕事以外は完全にチームワークである照明業務は、彼女が聞いてきたように、チーム内のメンバーがどのように動くのかを知っておくことが成功の鍵です。アメリカでも日本でも仕事の規模と業種によって照明業務の形態は様々です。したがって一概にその差を明言することは不可能ですが、「どちらかと言えば」という点をいくつか伝えました。一つは、アメリカに比べて日本の照明チームはポジション間の仕事の割り振りが明白でありつつも臨機応変に対応することです。照明デザイナーが仕込みに参加することは珍しくなく、「デザイナーは器材に触れてはならない」という決まりはありません。照明チーフ主導のもとに作業は進みますが、　チーフに言われなくても気がついたことを率先して片付けます。日本の照明スタッフは、照明デザインとその公演、番組、作品そのものの目的とねらいを理解し、今現場で何が起こっていて自分は何をするべきかを分かって行動します。

さらに、日本人は器材をハンガーで固定する際にあまりレンチを使わず手で締めること、かいしゃく棒でフォーカスすることもあること、仕事中あまりおしゃべりをしないこと、仕込みやばらしの際に音楽をかけないこと、予定した時間通りでなくても区切りの良いところで休憩をとること、日本のバレンタインは女性から男性にチョコレートを送る決まりなので差し入れはチョコレートが良い、などを話しました。

「女性照明スーパーバイザーの指示に年配の男性照明スタッフがついてくるか」彼女の最後の質問です。私は「あなたがいつも通り自信と情熱を持って仕事に接すればなにも問題はない」と答えました。より多くの人々が照明デザインを通じて文化交流を楽しむことのできる社会であることを心から願っています。